

白夜の国々 春夏秋冬

—ニュースレター 第33号 2012年 冬—

(独) 日本学術振興会 ストックホルム研究連絡センター
Japan Society for the Promotion of Science - JSPS Stockholm Office

目次

I. プロローグ

北欧の国 ストックホルムより (1)

II. ニュース

2011年ノーベルウィーク

JSPS コロキウム

Nuclear Energy and Nuclear Applications

王立工科大学での京都大学松本紘総長ご講演

JSPS 二国間交流事業の関係者が来会

在スウェーデン大使館主催天皇誕生日祝賀会について

リンショーピン大学キャリアフェアについて

東京大学病院 Study Tour について



クリスマスイルミネーション (ストックホルム)

III. レポート

JSPS コロキウム

Nuclear Energy and Nuclear Applications

日本—スウェーデンコロキウム参加の雑感

IV. スウェーデン学術研究の動向

ストックホルム市とノーベル財団が、ノーベル賞センターの設立に同意

ノーベル財団が国際諮問委員会を設立

スウェーデンの大学および専門大学—2011年次報告書概要版

「数学イニシアティブプログラム」最終報告書



王立公園 (ストックホルム)

V. お知らせ

セミナーの開催

職員紹介

本誌は、ストックホルムセンターのホームページ (<http://www.jsps-sto.com/>) に掲載しています

1. フロローク

北欧の国 スtockホルムより(1)

藤井 義明

私が、ストックホルムに来たのは、11月中旬であった。これから冬至に向かい、昼が益々短くなり、寒さが募る季節である。昨年や一昨年は、11月に雪が降り、気温も零下20度以下になる日の多い、厳冬であったと聞くが、今年の冬は、幸いに、比較的暖かで、所々にあるポプラ並木は、まだ青い葉をつけていた。東京の街に見られるような、クリスマス商戦の派手な飾り付けは、まだなく、街は落ち着いた雰囲気であった。しかし、12月に入るとアパートの窓々には、星やローソクを形取った飾りが見られるようになり、商店街のショウウィンドウにも、それぞれ趣向を凝らした、しかし、余り派手ではないクリスマスの飾り付けで、賑わうようになった。

そして、12月と言えば、ノーベルウィークの幕開けである。毎年、アルフレッド・ノーベルの命日である12月10日で終わる、ノーベル賞授賞式と晩餐会までの一週間に、ノーベル賞受賞講演、レセプション、ノーベル賞コンサートなどの一連の行事が執り行われるのである。ノーベルレクチャーは、それぞれ、化学賞と物理学賞はストックホルム大学で、生理学医学賞はカロリンスカ医科大学で、文学賞はスウェーデンアカデミーで行われる。平和賞の講演は、オスロのノルウェーの国会で行われることが知られている。



私は、12月7日に、カロリンスカ医科大学のベルツエリウス講堂で行われたノーベル生理学医学賞のレクチャーに参加した。会場は約300人が入ることの出来る、ノーベル賞レクチャーが行われるに於いては、小さな講堂であった。全席の半分くらいは、招待客によって占められていたので、2時間近く並んで、待っていた数百人の一般聴衆のうち、講堂に入ってレクチャーを聞いたのは、非常に少なかった。私は、幸いに、席を取ってもらっていたので、講堂でノーベル受賞者の講演を、直接、聞くことが出来た。

演者は、J. A. Hoffmann、B. A. Beutler と R. M. Steinman の順序で行われた。但し、Steinman は受賞発表の3日前に亡くなっていたので、弟子のM. Nussenzweig が代理で行った。三人の講演を続けて聴くと、今回のノーベル生理学医学賞は、異物侵入の初期に働く自然免疫から、抗体の産生を介した獲得免疫の活性化までを線としてとらえて、与えられた賞なのだとして理解された。自然免疫に焦点を合わせれば、違った組み合わせの人が、選ばれた可能性があったかもしれ

れないし、獲得免疫の活性化に重点を置けば、また、違った人選が行われた可能性もあるのではないだろうか。ノーベル賞受賞者に、選ばれる事の難しさを思った。歴史に“もし”と言う言葉は意味がないと言うが、どのような議論が行われて、ノーベル賞の三人の枠が決められたのか、興味のあることである。しかし、このことが分かるのは、50年後の公開のときまで、待たなければならない。

ノーベル賞受賞者三人の講演を聴いて、この分野の研究の発展に、日本人の研究者の貢献が、いかに大きかったかがよく分かった。特に、審良静男博士と稲葉カヨ博士は、講演者が、彼らの顔の写真と共に、実験データを示して、詳しく紹介していたのが、強く印象に残った。

12月のストックホルムの街を見ていると、まだ日の昇らない6時過ぎ頃から、黒っぽいコートを着て、足早に勤め先に向かう人が、ぼつぼつ増え始める。日中には、乳母車を押した人が、バスや地下鉄に乗り込んでくるのを、よく見かける。乳母車を押しているとバスや地下鉄の料金が無料になるのだそうだ。昼の短い、寒さの募るストックホルムの街であるけれども、街には、活気のようなものが感じられる。

休みの日に、ガムラスタンの旧市に行くと、観光客や、クリスマスプレゼントを買う人々で賑わっていた。ヒョートルゲットのノーベル賞の授賞式やコンサートが行われるコンサートホール前の広場には、市場が立っていて、客を呼ぶ威勢のよい声が、寒空に響いていた。ストックホルムの北側に位置するカロリンスカ医科大学のキャンパスや、その周辺は、都市再開発のためか、大工事が進行中で、大きなトラックや聳えるように高いクレーンが、何台も忙しく動いている。2015年頃まで続いたのだそうである。ギリシャ、イタリアやスペインなどの南ヨーロッパを襲っている財政破綻の不景気の風は、北欧のスウェーデンには、余り関係がなさそうである。ふと、イソップ物語のアリとキリギリスの寓話を思い出した。

しかし、街を歩いてよく見ると、寒い街角のコンクリートの歩道に、毛布一枚の上に、正座して物乞いする人が、結構いるのに気がついた。ストックホルム中央駅からセルゲイ広場を経て、ヒョートルゲットまでのメインストリートを歩く間に、数人の男女の物乞いを見た。日本からストックホルムにポスドクとして来ている研究者が、白昼に強盗にあったと言う恐ろしい話も聞いた。高福祉高負担のモデルの国、スウェーデンの安全な街と言われるストックホルムでも、社会的な歪みによる暗い闇が、確実に広がっているようである。

蟋蟀が深き地中を覗き込む 山口誓子

これから2年間、北欧の社会と科学技術の動きを注意深く見てゆこうと思っている(JSPS スtockホルム研究連絡センター長)。

II. ニュース

2011年ノーベルウィーク

スウェーデンの科学者アルフレッド・ノーベルの命日である12月10日に、毎年ノーベル賞の授賞式が行われる。授賞式があるこの日を含む1週間は「ノーベルウィーク」と呼ばれ、受賞講演者や晩餐会と言った様々な行事がノーベル財団によって催される。

本年は下記のスケジュールで開催された。

- 12月5日 受賞者来瑞
- 12月6日 受賞者ノーベル博物館訪問
医学・生理学賞受賞者プレスカンファレンス (カロリンスカ医科大学)
- 12月7日 物理学、化学、経済学賞受賞者プレスカンファレンス (スウェーデン王立科学アカデミー)
医学・生理学賞ノーベルレクチャー (カロリンスカ医科大学)
ノーベルレセプション (カロリンスカ医科大学およびスウェーデン王立科学アカデミー)
- 12月8日 物理学、化学、経済学賞ノーベルレクチャー (ストックホルム大学)
ノーベルコンサート (コンサートホール)
- 12月9日 ノーベルレセプション (北方民族博物館)
- 12月10日 ノーベル賞授賞式 (コンサートホール)
ノーベル晩餐会 (市庁舎)

(参考：ノーベルウィークスケジュール)

http://www.nobelprize.org/press/nobel/foundation/press_releases/2011/nobel_week_en_11.pdf

今年は、当地スウェーデンの詩人 Tomas Tranströmer 氏が文学賞に選ばれた関係もあり、当地でも例年より一層ノーベルウィークに関心が集まっていた。

12月7日には当センターが位置しているカロリンスカ医科大学で、医学・生理学賞のノーベルレクチャーが行われた。医学・生理学賞は、授賞発表後に死亡の事実が判明した Ralph M. Steinman 氏に代わり、彼の一番弟子である Michel C. Nussenzweig 氏がスタインマン教授の研究功績を紹介する形で講義を行った。また、Bruce Beutler 氏の講義の中で大阪大学 審良静男教授の研究が、Michel C. Nussenzweig 氏の講義の中で京都大学 稲葉カヨ教授の研究が言及され、今回受賞となった自然免疫の研究分野での日本人研究者の功績が大きいことが紹介されていた。

同日夕刻には、カロリンスカ医科大学およびスウェーデン王立科学アカデミーの両会場にて、関係者を招待したノーベルレセプションが開催され、盛況な賑わいを見せていた。



物理学、化学、経済学賞ノーベルレクチャー

12月8日においては、ストックホルム大学にて物理学、化学、経済学賞のノーベルレクチャーが行われ、1000人以上収容できるホールがゲストや学生を含む聴講者で埋まり大盛況であった。準結晶を発見し化学賞を受賞した Daniel Shechtman 氏は、発見当時の化学の常識からは考えられず、研究室を去ることを余儀なくされていた。同氏は講義の最後に「自分を信じスペシャリストに成れ」と説き、聴衆に感動を与えていた。また同日夕刻には、市内のコンサートホールにて、ノーベルコンサートが行われた。

12月10日には、ノーベルが息を引き取った時刻にちなみ16時半から授賞式が執り行われ、故 Ralph M. Steinman 氏に代わり、同氏の妻が他の共同受賞者2名と共に授賞式に出席した。その後会場を市庁舎の「青の間」に移し、晩餐会が執り行われ、受賞者やその家族・親戚、そしてスウェーデン王国一家、政治家、国外来賓が出席した。この模様はスウェーデン国営テレビでも中継され、国民の関心は非常に高く、例年視聴率は20%にも達するとのことである。メインテーブルについて受賞者やスウェーデン王国一家が退席すると、「黄金の間」での舞踏会の時間となり、夜通し続く舞踏会と共に熱狂のままノーベルウィークは終了を迎える(小野 一俊)。



ノーベルコンサート

JSPS コロキウム Nuclear Energy and Nuclear Applications

2011年10月13日および14日の両日、Chalmersska Huset(ヨーテボリ)において、当オフィス主催の標記コロキウムが開催された。本コロキウムは、1990年代にJSPSの研究者招へい事業で来日経験のあるImre Pázsit チャルマーシュ工科大学教授が中心となって企画し、日本より6名、スウェーデンより8名、計14名の講演者が参加し、開催されたものであり、両日通して、60名の聴衆があった。

福島第一原子力発電所の事故後だったので、コロキウムの内容は今回の事故が中心となり、日本側講演者からは事故についての科学的考察や津波対策の不十分さ、また講演者が半年間現地で事故対策支援活動に従事した経験などが講演された。スウェーデン側からは、今回の事故を踏まえてのスウェーデン国内でのEUストレステストへの取り組みなどが講演されていた。

13日の夕食時には、Imre Pázsit 教授が複数回にわたる自身の来日経験を熱心に講演しながら、日本の文化的魅力や学術研究レベルの高さを紹介し、このコロキウム開催の

支援を行ったJSPSに感謝の意が述べられていた(小野 一俊)。



(参考) アブストラクト

<http://www.jsps-sto.com/admin/UploadFile.aspx?path=/UserUploadFiles/Abstracts/Booklet1110.pdf>

王立工科大学での京都大学松本紘総長ご講演

2011年10月18日、王立工科大学において、2011Alfven Lectureが開催され、王立工科大学のLars Blomberg 教授からの招待として京都大学松本紘総長による「Two Contemporary Paradoxes in Economic Growth and in Higher Education & Research」と題する講演が行われた。



講演では、科学技術の発展が人類の生活の質の向上に寄与してきた一方で、世界人口の急激な増加、化石資源の枯渇、地球環境問題、また東日本大震災後の福島第一原発事故などの問題を引き起こしたことに言及し、今後人類が生きていくためには、哲学、言語学、社会学などの人文社会科学と一体となって科学技術を考えていくことが重要であ

り、そのためにも自らの専門分野だけでなく、幅広い分野の知識を学ぶことが必要である旨講演した。

当日は王立工科大学の研究者や学生を中心に約100名が講演を聴講し、講演後には活発な質疑応答が行われ、松本総長の述べた最近の学問のあり方や共生(ともいき)の考え方について聴衆は大きく共感を示していた。



なお京都大学では、王立工科大学をはじめ、ウプサラ大学、ストックホルム大学との間で学術交流協定を結んでおり、スウェーデンの研究者ならびに学生との交流を進めている。

JSPS 二国間交流事業の関係者が来会

12月12日において、JSPS 二国間交流事業の関係者が来会され、共同研究の進捗状況や今後の活動について積極的な意見交換等を行った。

2011年4月より東京大学と王立工科大学との間で「ナノ基盤領域の近接場光相互作用にいたナノフォトニックシステム構築」をテーマに共同研究を実施しており、2012年6月にはストックホルムにおいて第2回ワークショップを開催予定である（吉澤 菜穂美）。



在スウェーデン大使館主催天皇誕生日祝賀会について

天皇誕生日祝賀会が11月24日午後5時～7時、在スウェーデン大使公邸において開かれた。公邸はストックホルム郊外の北10数キロ離れたジュウルショルムと呼ばれる風光明媚なウォーターフロントと伺ったが、冬で暗闇の中で想像するしかなかった。

祝賀会は世界的に有名なアマチュアのスウェーデン男声合唱団オルフェイ・ドレンガルーの合唱から始まった。君が代や荒城の月などの合唱もあり、日本人の参加者には感慨深いものがあつた。渡辺大使の東日本大震災に対してスウェーデンから寄せられた救援援助に対する御礼の言葉、

震災からの復興の話、日本経済の復興の兆しの話など瑞・英語を交えた流ちょうな挨拶があつた。

参加者は200人を越えていたと思われ、その1/4は在スウェーデンの日本人であり、メインホールはいっぱい、ロビーにも人が溢れていた。折から、体調を崩され入院されていた陛下のご退院の日とも重なり、大変おめでたい日になった。書道や折り紙の実演の催しもあり、参加者はそれぞれ、意義深い日を楽しんでいた（JSPS スtockホルム研究連絡センター長）。

リンショーピン大学キャリアフェアについて

11月24日リンショーピン大学において、「LiU Junior Faculty Career Day 2011」と題して、当大学の Junior Researcher（ポストドクおよび助教）を対象としたキャリアフェアが開催された。当キャリアフェアは2008年から Junior Researcher の就職およびキャリア形成支援を目的に毎年開催されており、今回は約60名の参加があつた。当センターも、スウェーデンの企業に交わりながら展示ブースを設置し、主に日本へのフェローシッププログラムを中心に広報活動を行った（小野 一俊）。



東京大学病院 Study Tour について

11月29日、30日にかけてカロリンスカ医科大学ソルナキャンパスおよびフリーディングキャンパスにおいて、東京大学病院 Study Tour が行われた。非常時における病院の対応というテーマのもと、東京大学病院の放射線部、看護部、医療機器管理部、検査部、事務部門より9名の教職員が当

地で実地見聞を行った。11月29日には、カロリンスカ医科大学勤務の日本人医師を交えながら、昼食を囲みつつ、当地の医療体制について積極的な意見交換が行われた（小野 一俊）。

III. レポート

JSPS コロキウム Nuclear Energy and Nuclear Applications

山本 章夫

さて最初にクイズです。人口あたりの原子力発電所の数が最も多い国はどこでしょうか?答えは文中にあります。

2011年10月13日、14日の二日間、スウェーデンのヨーテボリ (Gothenburg) において掲題のコロキウムが開催された。このコロキウムは、Charmers 工科大学の Imre Paszit 教授により主として企画・立案されたもので、原子力エネルギーと放射線の応用に関し、幅広いテーマをカバーする形で実施された。日本からは口頭6件、ポスター2件、スウェーデンからは口頭7件、ポスター10件の発表があった。

コロキウムはヨーテボリの中心にある Charmers 工科大学の施設で実施された。この施設は、Charmers 工科大学の創始者 (founder) である Charmers 氏の家で、歴史的な建造物であるが、このような形で現在も有効活用がなされていることに感銘を受けた。ヨーテボリは、かつてヨーロッパにおける東インド会社との主要な貿易港であり、Charmer 氏はこの貿易により財をなしたとのことである。

コロキウムでは以下の5つのセッションが設けられた。

Session I: Fukushima - The Event and its Implications

Session II: Radiation - Biological Effects and its Applications

Session III: Core Physics, Thermal Hydraulics, Stability and Safety

Session IV: Spent Fuel Disposal, New Fuel Cycles and Safeguards

Poster session

コロキウムの開始に当たり、Charmers 工科大学の学長である Mats Viberg 氏と JSPS スtockホルム研究連絡センターの佐野浩センター長より、東京電力の福島第一原子力発電所における事故を踏まえてのコロキウム開催の意義な



どについて開会の挨拶があった。

Session I では、福島第一原子力発電所における事故について、事故の概要、教訓さらに新たな概念である

“resilience engineering”を用いた原子力安全への取り組み、スウェーデンにおける原子力発電の状況、福島第一における事故を踏まえた安全規制上の対応などについて紹介があった。

Session II では、放射線に関する講演がなされた。植物の代謝研究のための放射線利用、放射線・重粒子線を用いたがん治療の研究と現状、宇宙空間における被ばくの問題といった放射線の利用と応用に関する講演に加え、福島第一事故による食品の放射能汚染の影響、緊急被ばく医療の対応状況、チェルノブイリ原子力発電所事故の経験などについて報告がなされた。

Session III では、原子力発電所を設計・管理するためのシミュレーション技術について講演がなされた。原子炉の中では核反応に加えて伝熱・流体の挙動についてシミュレーションを行う必要がある。また、原子炉の構造は複雑であることから、いわゆるマルチフィジックス・マルチスケールシミュレーションが必要になるが、この方法論について報告があった。また、原子力発電所で発生する可能性がある様々な異常状態において、運転員が取り組む操作の難しさを定量的に評価する手法についての研究結果が紹介された。

Session IV では、スウェーデンにおける使用済み燃料の深地層処分の進捗状況、高エネルギーの陽子加速器と原子炉を組み合わせた加速器駆動未臨界炉、秘匿された核燃料物質を発見するための技術開発について報告があった。

ポスターセッションでは、主として原子炉および核融合炉に関するシミュレーション手法について、発表がなされた。

上記のように、本コロキウムでは原子力と放射線、およびその利用に関し、様々な分野を包絡した講演と意見交換がなされ、大変有意義であった。

さて、スウェーデンは、ノーベル賞のほかにも脱原発の取り組みが日本で有名である。その一方、スウェーデンの人口あたりの原子力発電所の数はフランス、米国や日本より多く、世界の「原子力先進国」であることはあまり知られていない事実である。また、使用済み燃料の地層処分などについても場所をすでに選定し、着々と作業を進めている。スウェーデンの電気供給は約半分が原子力発電、残り半分が水力発電である。スウェーデンにおいては、日本の福島第一原子力発電所の事故は比較的冷静に受け止められているようであり、その理由を問うと、「地震と津波がないから」とのことであった。ただし、嵐などによる洪水はあり、その対応については今後の検討事項とのことであった。

私の趣味の一つはランニングである。十月中旬とはいえ、明け方の気温は 0℃近くまで下がっており、寒くはあったが、大変天気にも恵まれたこともあり、コロキウムの期間中、毎日ランニングを楽しむことができた。町中を走り回っていて気づいたことは、ヨーテボリの町は、オランダのそれに似ているということである。これについて Pazsit 教授に聞いたところ、ヨーテボリの町は、オランダ人によって設

計された、とのことである。これを聞いて納得した。

最後に、今回のコロキウムの主催者であり、日程調整など様々な事務作業を行って頂いた JSPS スtockホルム事務所の皆様、本コロキウムを企画・立案した Charmers 工科大学の Imre Paszit 教授に改めて御礼申し上げたい（名古屋大学工学研究科教授）。

日本—スウェーデンコロキウム参加の雑感

中西 友子

11月の13日と14日、日本学術振興会主催の日本—スウェーデン・コロキウムがスウェーデンのイオテボリで開催され出席する機会があった。この始まりは、半年ほど前に遡る。スウェーデン側でこの会を取り仕切っていた Charmers 大学の Imre Paziet 教授から、今度スウェーデンで原子力関連のコロキウムがあるので、放射線利用関連の話をしてくれないかという打診があったからである。Imre とは20年ほど前に中性子線を利用した国際会議で一緒に座長をしたことに始まり、その後時々会う機会があった。彼はハンガリーで生まれ核物理を専門としてきた。世界中

原子力関連の教育用施設も小さいながらかなり整っていた。小さな中性子源もあり、学生実験用の放射化分析に使われていた。イオテボリは土壌中のウラン含量が高いとのことで、自然放射能との関連もよく考えられて教育が行われていた。

見学日は、定期的に昼食時に開催されるランチョンセミナー日でもあったため、昼食時は、Imre のところで、あと1カ月ほどで博士論文を出すという大学院生の研究発表を聞いた。トカマク型のプラズマについてのシミュレーションについてであったが、私たちにも判り易く、また一生懸命考えて自分なりの工夫をしていることが伝わってきた。周りの学生からも彼は優秀な先輩だと一目置かれているようであった。昔の日本の研究室で育ってきた人たちの環境のような気がした。



でノーベル賞を最も多く受賞した人の元々の国籍はハンガリーが一番多いと聞いていたが、彼も今はスウェーデンにいるものの、元々の優秀なハンガリー人気質を漂わせている人である。

コロキウムに先立ち、Chalmers 大の原子力関連の施設の見学会があった。学生数が少ないためか、講義室やセミナー室は日本よりもやや小さめではあるが、内装や椅子・机・照明など全て気のきいたデザインで、日照が少ない冬でも明るい気持ちになりそうな雰囲気である。

ポジトロンを研究している人の実験室に行って驚いた。装置は殆ど自分で組み立てたものである。加工を専門にしてくれる職人気質の人がワークショップに居て、大型装置は殆ど自分たちが作ってきたという自負も持っていた。まず、ものづくりから実験が始まるという気風が脈々と学生にも伝わっていた。原子炉を模して作ったガラス容器からのヨウ素の拡散実験、使用済燃料を埋めるサイトの岩石の性質を調べる実験など手作りの装置が目立った。

Chalmers 大学はかつて3つも東インド会社を持っていた富豪の寄付でできた大宅であるが、コロキウムはかつて Chalmers が住み、また今でも理事長が住んでいる邸宅で開催された。その邸宅は中庭のあるがっしりした石作りでいくつもの部屋があり、食事の時は大きなシャンデリアが下がる部屋に長細い机が用意された。机の中心線上に何本のろうそくが用意され、給仕の人が出された料理の食材について説明してくれたがその英語が実にきれいだったことが印象に残った。

コロキウムではスウェーデンと日本人が交互に講演を行った。まず、福島事故についてのセッションがあり次に原子炉工学、廃棄物、医療などの放射線応用など広い分野についての講演が行われた。スウェーデンからの発表は原子力の研究そのものが多かったが、日本からの発表は安全性をどう考えるかなど、ソフト面が多かった。どうも日本の原子力関連の研究は、原子炉の現場に根差した実験研究はというよりも安全性を土台にしたソフト研究に大きく移ってきているような印象を受けた。

イオテボリの町は、派手さなどは殆ど無く古い建物が立ち並んだ運河の町であるが、大学も同様に落ち着いた雰囲気の中でレベルの高い教育・研究が行われているという印象を受けた。特に、中国や米国の大学に見られるような激しい競争感を学生に植え付けることよりも、個人をしっかり育てていく気風と思われた（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）。

IV. スウェーデン学術研究の動向

ストックホルム市とノーベル財団が、ノーベル賞センターの設立に同意

2011年12月1日に、ノーベル財団とストックホルム市はBlasieholmen島のNybrovikenに現在の国立美術館と隣接した形でノーベル賞センターを設立する同意書に署名した。

ノーベル財団のエグゼクティブディレクターであるLars Heikensten氏は、「同センターはノーベル賞受賞者や研究者・学生・一般市民のための現代的な会議スペースを創設し、『科学の発展と人類の平和』に寄与するというノーベル賞のメッセージを普及する場となるであろう」と述べている。

またストックホルム市長であるSten Nordin氏は、「ストックホルム市は世界トップクラスの教育・イノベーション・研究の集積地となることを目指しており、同センターは若い世代の知識や好奇心の探究に有益な施設となると同時に多くの観光客にとっても非常に魅力的なものとなるであろう。」と述べている。

同センターには現存のノーベル博物館やノーベル財団も収容させ、センターを中心とし、スウェーデンおよびストックホルムがノーベル賞に関する国際的ネットワークのハブとなることを目的としている。

2018年12月の開所を目指し、2012年に建設に関するコンペを行い、2015年末より建設工事を開始する予定である（吉澤 菜穂美）。

(参考)

ノーベル財団 HP

http://www.nobelprize.org/press/nobelfoundation/press_releases/2011/nobel_prize_center.html

ワーキンググループ報告書

http://www.nobelprize.org/press/nobelfoundation/press_releases/2011/nobel_prize_center_rapport_sv.pdf

【建設予定地】



ノーベル財団が国際諮問委員会を設立

2011年11月16日に、ノーベル財団は、国際諮問委員会を設置することを決定し、前首相であり現在VolvoグループCEO、エリクソン会長のLeif Johansson氏が、初代会長に任命された。

国際諮問委員会は、アルフレッドノーベルの意思の実現とその振興への貢献だけでなく、財団の財政面に関する指導と支援という役割も期待されている。他の委員は、ノー

ベル賞の将来的な発展に有益な各分野の著名人から構成され、2012年中に任命される予定である（吉澤 菜穂美）。

(参考)

ノーベル財団 HP

http://www.nobelprize.org/press/nobelfoundation/press_releases/2011/adv_board.html

スウェーデンの大学および専門大学—2011年次報告書概要版

スウェーデンにおける高等教育に関する活動状況について毎年スウェーデン高等教育庁がまとめている「スウェーデンの大学および専門大学2011年次報告書概要版」が発表された。国際情勢と比較したスウェーデンの高等教育、昨年度の各大学の活動報告、スウェーデンの高等教育に関する学問体系や方整備等の基本情報、各大学の主要データ等が掲載されている（吉澤 菜穂美）。

(参考)

高等教育省 HP

<http://www.hsv.se/download/18.7dac986013389229f6e80002786/1115R-swedish-universities-annual-report-2011.pdf>

「数学イニシアティブプログラム」最終報告書

2009年から2011年に国家によって進められた「数学のイニシアティブプログラム」に20万人の学生と12,000人の教師が参加した。最終報告書は、参加した多くの教師がこのイニシアティブが良い教育につながったと報告しており、コンピュータや実験教材よりも教師の能力開発に資金を投入した方が効果的であると結論づけている。

さらに2012年から2015年まで、新たなイニシアティブが実行され、推定40,000人の教師が参加する予定である（吉澤 菜穂美）。

(参考)

スウェーデン学校庁 HP

http://www.skolverket.se/2.3894/publicerat/arkiv_pre_ssmeddelen/2011/over-200-000-elever-deltog-i-satsning-pa-matematik-1.164930

数学イニシアティブ最終報告書

http://www.skolverket.se/polopoly_fs/1.164968!Menu/article/attachment/Utv%C3%A4rdering_matematiksatsning_ramboll.pdf

V. お知らせ

セミナーの開催

JSPS スtockホルム研究連絡センターでは下記の通りセミナーを開催します。参加は無料ですので、興味のある方はふるってご参加ください。お問い合わせは当センター（info@jspm-sto.com）までご連絡ください。

KVA-JSPS セミナー

講師：石田 浩（東京大学社会科学研究所）

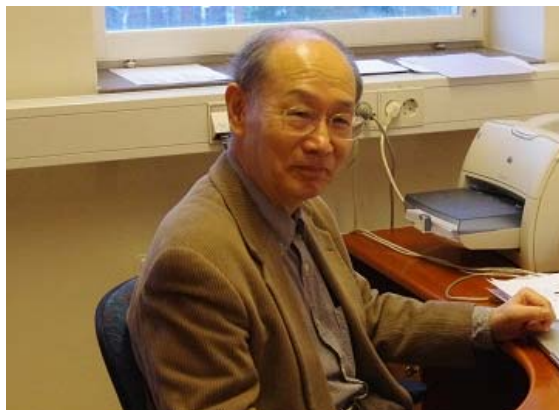
日時：1月24日（火）および1月26日（木）

場所：ストックホルム大学

職員紹介

11月からセンター長として着任しました。海外生活は、ニューヨークのロックフェラー大学で、ポストドクとして2年半を送って以来、約40年ぶりのこととなります。ストックホルムには何度か来ていて、一度は住んでみたい街と思っていました。薬物や低酸素による遺伝子発現の研究をしていて、カロリンスカ研究所には、旧知の友人が何人かいますので、彼らとの交流を楽しみながら、北欧の国々の教育や科学技術などの情報をお届けしたいと思っています。

（JSPS スtockホルム研究連絡センター長 藤井 義明）



「白夜の国々 春夏秋冬」 ニュースレター 第33号

編集：小野一俊

発行日：2012年1月10日

発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先：JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171-65 Stockholm, Sweden Phone: +46 (0) 8 5248 4561 FAX: +46 (0) 8 31 38 86

Website: <http://www.jspm-sto.com/> E-mail: info@jspm-sto.com